

「Mr. ムムリクを待ちながら」

作 ひきだ愛音

登場人物..

客／高岡

店主／広海

香織

(0場)

6月11日、夜。外は雨が降っている。

舞台は、とある喫茶店。寂れた商店街の片隅に古くからあった」とでもいうような、セピア色の店内。根拠はないが、なんとなく水出しコーヒーとナポリタンが旨そうな印象を与える。

出入り口は二つ。手前のドアは店の入り口である。開閉すると揺れて鳴る小さな鐘が付いている。扉の近くには壁掛け時計。

そして店の奥、カウンターの向こう側は小さな厨房に続いており、観客からは見えないが、店側の人間が利用する勝手口があり、外界と繋がっている。

一見どこにでもありそうなこの店が唯一他の喫茶店と違うのは、店内の片隅に巨大なコルクボードがかけてあり、沢山のポラロイド写真が貼られていることである。写真は全て景色。人は写っていない。

コルクボードの隣には、アップライト型のピアノが置かれている。その上にも2枚の写真があり、一枚はやはり景色だが、もう一枚は唯一、人物を撮った写真である。小学生くらいの女の子が写っている。

カウンターの前には、黒いエプロンをした五十代くらいの痩せた人物——この店主らしい——が立っている。

第一場 入梅(にゅうばい)

店の入り口のドアを押し開け、肩をぬらした男の客が入ってくる。

店主：いらつしやい。

客：あ、もう終わりですよね？

店主：大丈夫ですよ。

客：いいですか？…すいません、目の前でバスに行かれちゃって。

店主：ああ、そのバス停？一時間に一本だからね。

客：知りませんでした。

客、カウンター席に上着をかけ荷物を下ろす。

客：じゃあ、すいません、ブレンドコーヒー一つ。

店主：ブレンドね。はい。

客、店内を見渡す。と、コルクボードに気づき、近寄っていく。そして、一面に埋め  
尽くされた様々な風景―山、海、田んぼ、街―を、しばらく見つめる。

客：(店主に)これ、

店主：はい？

客：すごい数ですね。

店主：でしょう。

客：全部で何枚くらい、

店主：いくつだろう？大体…12かける15年分として…

客：15年分？

店主：そう。

客：マスターの趣味ですか？

店主：え？

客：あなたの。

店主：あ、私？「マスター」じゃないんだ、私は。飾ってるのは私の趣味だけ。

客：これは、ここの名物みたいな？

店主：名物って程でもないけど。でも、初めて来たお客さんなんかは、びっくりするみたいね。

大量だから。

客：今の僕みたいに。

店主：そうそう。(コーヒーカップを手に)ブレンド、お待ちどうさま。

客：あ、どうも。

客、コルクボードとは別にピアノの上に置かれた写真にも気付くが、おとなしくカ  
ウンターに戻り、コーヒーを飲む。

客：うまい。(店主に)美味しいです。

店主：ありがとうございます。

客：今まで飲んだコーヒーの中で一番うまい。

店主：そりゃどうも。

客：特別な豆とか使ってるんですか？

店主：別に。

客：じゃあコツとか、熟練の技とか？

店主：まあ、プロですから。なんてね。

客：ははあ。おみそれしました。で、あれはどこで撮ったんです？

店主：撮ったのは私じゃない。私は飾ってるだけ。

客：じゃあ、撮ったのはやつぱり、ここのマスターですか？

店主：さあ。どうぞでしょう。

客：え？

店主：誰が撮ったと思う？

客：え、僕が答えるんですか？じゃあ……あのピアノの上の、女の子！

店主：香織ちゃん？残念、はずれ。

客：正解は？

店主：正解は・・・わからない、が正解。

客：え？

店主：私も知らないんだ。あれね、ウチに勝手に届くの。

客：届く？

店主：そう。

客：どういうことです？

店主：毎月一通、あて先しか書いてない封筒が届いてね。中身もこういう写真が一枚入ってるだけ。ちなみにピアノの上に置いてあるのが「先月の一枚」ね。

客：この、山の？・・・え、でも、じゃあアレですか、誰から送られてくるかもわからなくて、なのにそれを飾っている・・・？

店主：結構よく撮れてるし。

客：気味悪くないんですか？

店主：全然。慣れちゃえばなんともない。今じゃ、逆に楽しみなくらいよ。

客：楽しみ？

店主：だって、なんかラブレターもらってるみたいじゃない？

客：ラブレター、ですか？

店主：そう。思わない？

客：うーん・・・だってただの写真でしょ？

店主：ただの写真って思うからつまらないの。想像力をちよつと働かしてみれば、ね？

客：(想像力を働かそうとするが)・・・だめだ、降参。例えばどう

いう・・・？

店主：例えばね、これを送ってくる人は、写真とは思ってないかもしれない。

客：じゃ、何です？

店主：その人の「世界」。あなたにわたしの見ている世界をあげます」なんてね。

客：結構、ロマンチストなんですね。

店主：引いちゃった？

客：ちよつと。

客、コーヒーを啜る。店主、写真の方を見つめる。

遠くで、呻くような雷の音。

客：でも、理由は必ずあるんですよね。

店主：何が？

客：その写真を送ってくる理由ですよ。ラブレターにしたって、せつかく「世界」を送っても、その送り主が誰だか分からなきゃ、デートの約束も出来ないでしょう。

店主：そりゃそうね。

客：しかもそいつはそれを15年も続けている。きっと何か特別な意味があると思いませんか？

店主：そうなのかな。

客：何か、心当たり無いんですか？せめて、きっかけになるようなことは。

店主：さあ、どうなんだろうね。

客、店主の顔をじつと見る。

店主：なあに。

客：何かあるんでしょう？こころあたり。教えてくださいよ。

店主：そんなこと聞いてどうするの。

客：別に、どうってこともないんですけど。

店主：暇つぶしね。

客：すいません。でも僕は、想像より真実の方がロマンを感じるんで。ね？なんかあるなら話してくださいよ、見当。

店主：そうねえ。見当……

(間)

店主：さつき、マスターじゃ無いって言ったでしょう？でもね、半分くらいは、そんなんじゃないかって思ったりもするのね。

客：マスターが送ってくるって？

店主：うん・・・昔は趣味でよく写真撮ってたし。彼、一人旅が趣味なんだけど、いや、あれはもう趣味というより、生きがいか。旅先で写真を撮っては、よく見せてくれたから。

客：でもどうしてわざわざ郵送で？帰ってきたときに見せればいいのに。

店主：帰ってこれないからかな。

客：え？

店主：行ったつきりまだ帰ってきてないの。

客：一人旅に？

広海：そう。写真がうちに届くより前から。だから本当に彼なのか確かめようもないんだけど。

客：より前から？ってことは、十五年間、帰ってないって・・・

店主：いうことになるね。

客：一度も？

店主：一度も。

客：・・・それはつまり、失踪ってことですか？

店主：一般的にはそう言うのかな。でも失踪って、私の勝手なイメージだけど、ある日突然いなくなる感じなのよね。マスターはちゃんと「行って来ます」って出たから、帰りが遅いだけって気がしちゃうのかな。

客：なんだか、余裕ですね。

店主：そんなことないよ。でも、初めてじゃなかったし。生きがいだって言ったでしょ？昔からしょっちゅう放浪して、ろくに連絡もよこさなかった。まあ、だから、待つ方も慣れざるを得ないよね。

客：でも、十五年でしよう？

店主：そう。さすがに今回はちょっと長いよね。香織ちゃんだってまだ小さかったのに。

客：搜索願とかは、

店主：一応ね。でも出したからって、こっちからは他にどうすることも出来ないじゃない？

客：十五年前の、いつ頃ですか？

店主：八月の頭かな。夏休みが始まった頃だったから。私ね、昔は中学で教師やってたの。

客：へえ？

店主：昔は先生にも夏休みがあったからさ、覚えてる。

客：何教えてたんです？

店主：美術。

客：そうだと思った。もしかしてマスターも？

広海：そう。国語の講師。非常勤だったから学校に来ない日も多くて。そういう日はマウンテ

ンバイクに寝袋下げて、カメラとあとは小銭入れぐらいしか持たないで、結構遠くまで走り回ってたわ。

客：へえ。それで写真をもらったわけですか。

店主：そう。小学生が図工の工作見せてくるときみたいに、得意そうな顔しちゃって。広海

先生見てください、これが僕の見てきた世界なんですよ！」って。・・・おなか空いたな。

客：へ？

店主：なんか作ろうかな。あなたも何か食べる？(厨房へ)

客：え、いいんですか？あ、じゃあ・・・(メニューを見て)オムライス、一つ。

店主：(奥から声のみ)オムライスね。はい。・・・あ、

客：どうしました？

店主：(顔を出し)ごめんなさい。卵今切らしちゃって。ただのチキンライスになっちゃうんだけど。

客：そうですか。

店主：他のメニューなら普通に作れるけど？

客：じゃあ、(再びメニューを見)ナポリタン、ください。

店主：了解。ごめんね。



店主、有線ラジオを流し、厨房へ消える。やがて厨房の奥から料理する音が聞こえてくる。

客、部屋の隅のほうまで行き、携帯電話をかける。

客：もしもし、高岡です。毬本編集長を。：あ、毬本さん？お疲れ様です。今、大丈夫ですか？：教えてもらった「ムリク」って喫茶店、見つかりました。今、店の中です。：大丈夫です。料理してるんで。：ええ、ヒロミとか言う人でしたね、それっぽい雰囲気がありました。でも、わりと普通でしたよ。：それなんですけど、ちよつと興味深いものがありました。：写真なんですけどね。毎月、匿名で写真が送られてくるっていうんですよ。：ええ、Sのしわざだと思います。やつの潜伏していた場所と思われる写真が沢山送られてくるんです。：教えてくれてありがとうございます。予想以上のことが分かった。：Sはただ逃げてるわけじゃなかったんだ。：いや、その広海って人の話が、ちよつと気になって。もしかしてあいつは、懺悔のつもりなんじゃないかと思って。：ああの頃Sは、族の中でも下つ端でした。あいつがやったのは隠へいだけです。仮に立件されて家裁で裁かれたって、少年院にも送られなかったはずですよ。：俺のときもそうだったし。：毬本さん、やつぱり、話した方がいいんですかね？ご遺族に。：勿論、ルポを書くなら承諾は得なきゃいけないけど、でも。：え？：いや、娘さんの方にはまだ。：ええ、もうちよつと探ってみます。はい。：お疲れ様でした。

高岡と名乗った客、電話を切る。そして再びコルクボードの前へ。やはり気付かれないように気を配りながら、鞆からデジタルカメラを取り出し、コルクボードの写真に向ける。

カメラのフラッシュがたかれる。と、同時に暗転。闇の中でフラッシュが三回光る。

続